

地域社会分析から捉えるスポーツ活動 (2)

— 地域代表者の語りを通して —

後藤 貴浩

Sports from Regional Social Analysis (2)

: Analysis of a Regional Delegate Person's Narration

Takahiro GOTO

(Received October 1, 2012)

1. 研究の背景

都市社会学者の鈴木広 (1986) は, 現代における日本人の近隣拒否志向性によって, 公共的な場としての近隣関係が発展する余地は乏しいと指摘している。加えて, 「ハレ感覚と不可分に成立してきたスポーツは内的必然として, レジャー志向, 都市志向性と不可分であり, 逆にいえば, 近隣志向性とは反発関係」にあることから, スポーツはいやがうえにも「非日常」の方向に整形されるとしている。彼の主張に従えば, 現代社会におけるスポーツは近隣社会とは近い関係にあるとはいえず, スポーツの側から主張されるような地域社会形成への寄与はそれほど大きくないといえる。しかし, 彼の主張は具体的な地域社会を分析対象として導かれたものではない。また彼自身が指摘するように, 地域住民のスポーツ実践様式は彼らの生活構造によって特徴づけられているとするならば, それぞれの地域社会の構造に応じたスポーツの位置づけを確認することが可能であるということになる。

このような関心のもと, 本研究の第1報では異なる社会構造を有する地域を対象に, 住民の生活構造分析(アンケート調査^{註1)})を通して, 地域社会とスポーツの関係性について検討した(後藤, 2010)。そこでは, 以下の点が明らかにされた。全ての地区で「スポーツ大会」を地域行事と認識している者が一定程度存在しており(図1), また地域集団では全ての地区で同じような割合でスポーツ集団に所属している者が存在している(表1: 地域集団への所属)。その中で, 地域行事への無関心層の多い混住A(表1: 地域行事の有無)は「スポーツ大会」を地域行事として捉える者が最も多く(図1), 1週間に1回以上のスポーツ実践

者の多い(表1: スポーツ実施状況), いわば“スポーツの盛んな地区”といえる。しかし, スプロール的に混住化が進んだため地区全体の統一感や連帯感は乏しく(表1: コミュニティモラル), スポーツ活動そのものは, 自立した個人の生活拡充のための活動として浸透している。同じく混住化地域である混住Bでは, 近隣関係が減退し(表1: コミュニティモラル), 健康志向を中心とした個人的あるいは家族内のスポーツが実践されている。また, 旧農家集落と新興住宅の住民をつなぐ地域行事(地蔵祭り, モグラ打ち, 宮相撲)が存在するなかでは, スポーツ行事そのものは地域行事としての認識は薄い(図1)。一方, 生活構造の現代的影響を受けつつも古くからの共同性を引き継ぐ農村や宅地開拓当初からの入居者をリーダーとし積極的な地域づくりに取り組んできた団地では, 地域の祭り(ふれあいサンデー, ホタル祭り)や共有財産(集会場, 山林)を有しており, スポーツそのものは地域社会においてそれほど重要な位置を占めていない(図1)。このように, 地域住民のスポーツ活動はその置かれた地域社会の構造のあり方によって, 異なる社会的な意味を帯びる可能性が示唆された。しかし総じて, 地域社会のなかではそれほど大きな位置を占めるものではないと言える。一方, 個々の具体的な事例をみると, 例えば, 団地では, 開拓当初からの入居者を中心にソフトボールチームが結成され今なお活動中であり, 頻繁に地区の共有財産である集会場に集まっている。また同地区において地域行事としての認識の高い「ふれあいサンデー」のプログラムには必ずスポーツ活動が組み込まれている。混住Bでは, 旧農家集落に継承された行事として宮相撲(子ども相撲)大会が開催されている。そこでこの第2報では, 地域住民の代表者へのインタビュー調査を通して, このような

スポーツ実践と地域生活の関係性について、それぞれの地域の歴史的・社会的な構造変化を踏まえて検討することとした。

3. 研究の方法

1) 対象地域の概要

大津町は、熊本市の東方約19kmに位置し、古くから肥後(熊本県)と豊後(大分県)を結ぶ豊後街道(現国道57号線)の要衝であった。また、阿蘇外輪西部に連なる広大な森林、緩やかな傾斜をなして広がる北部畑地帯、豊富な水資源を生かした南部水田地帯を有する農林業の盛んな地域でもあった。現在はJR豊肥本線が町中心部を東西に横断し、国道57号と国道325号が縦・横断すると共に、熊本空港、九州縦貫自動車熊本ICに近接する交通条件に恵まれ県下でも有数の工業集積地域となっている。

町全体が混住化社会を形成してきた大津町では大幅に人口・世帯数が増加(1975年:18,086人・4,642世帯、1995年:26,376人・8,187世帯、2010年:30,973人・11,430世帯)している。また、1世帯当たりの人員は減少(1995年:3.22人、2010年:2.71人)しており、小世帯化が進行している。年齢構成では、年少人口5,035人・生産人口19,784人・老年人口5,901人となっており高齢化率は19.2%と熊本県内では隣接する菊陽町に次いで2番目に低い。

混住Aは、278世帯、人口605人、高齢化率22.8%となっている。住宅構成は、旧農家集落、旧宅地(主に雑穀商や金物屋など)、築30年程度の一戸建て団地、近年造成された一戸建て団地、マンション等で構成される。旧農家集落は34世帯で、うち専業農家は3世帯である。天神祭などの伝統的行事は旧農家集落で存続している。

混住Bは504世帯(実際に区費を払っている世帯は256世帯)、人口1,433人、高齢化率8.4%となっている。旧農家集落の周囲に一戸建て団地とアパートが立ち並ぶ。大型の宅地開発ではなく、地主(旧農家集落住民)が農地を転用し不動産会社に売却することで形成された。平地であったことと、町の中心部に近いこと、さらに、高校、中学、小学校、病院等が区内にあるということから急速に宅地化が進んだ。旧農家集落は、平場の農地と白川の豊富な水があり比較的裕福な農家集落であった。それでも、農業収益と比べて、土地売買による収益やアパート経営による収益の方が多いため、兼業化・非農家が進んだ。38戸あった農家が、現在では専業農家3戸、兼業農家10戸となっている。地域には旧農家集落住民と子供会が連携し、伝統行事(モグラ打ち、子ども相撲など)を行い、来住者との交流を図っている。

団地は、180世帯、人口487人、高齢化率6.8%となっている。大型一戸建て団地とアパート(20戸程

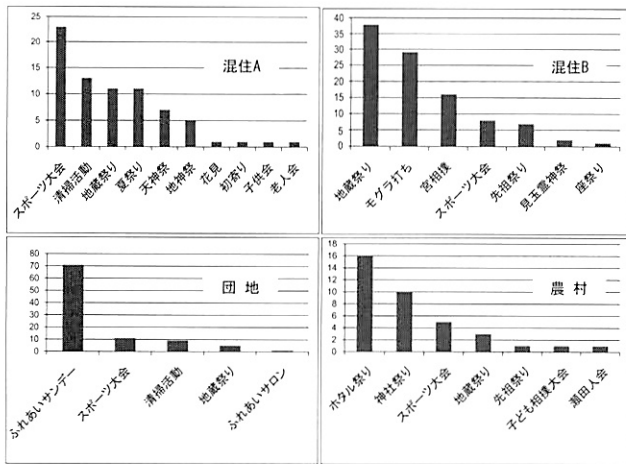


図1 地域行事

表1 地域生活とスポーツ

(%)

地区(N)	地域集団への所属					
	無	自治会等	PTA等	氏子等	農協等	スポーツ等の団体
全体(326)	17.8	48.5	13.8	12.9	8.3	28.2
混住A(105)	20.0	50.5	13.3	12.4	7.6	27.6
混住B(92)	23.9	35.9	16.3	16.3	7.6	28.3
団地(84)	13.1	69.0	11.9	1.2	1.2	28.6
農村(45)	8.9	31.1	13.3	28.9	24.4	28.9
地区(N)	スポーツ実施状況					
	1週間に3回以上	1週間に1~2回	月に1~3回	非実施		
全体(326)	16.4	19.6	21.1	42.9		
混住A(105)	17.5	25.2	15.5	41.7		
混住B(92)	13.6	18.2	27.3	40.9		
団地(84)	17.9	17.9	20.2	44.0		
農村(45)	16.7	11.9	23.8	47.6		
地区(N)	地域行事の有無		コミュニティモラル			
	ある	ない	高モラル	中・低モラル		
全体(326)	71.2	28.8	37.7	62.3		
混住A(105)	53.0	47.0	31.7	68.3		
混住B(92)	63.6	36.4	24.4	75.6		
団地(84)	100.0	0.0	54.9	45.1		
農村(45)	73.2	28.8	47.6	52.4		

2. 研究の目的

本研究の目的は、地域住民の代表者による地域への語りを通して、地域社会におけるスポーツ実践の位置づけについて検討することである。

度)で構成される。30年ほど前に宅地開発が行われ、残りの区画は1~2区程度となっている。アパートの世帯は自治会には入っておらず、交流はほとんどない。開発当初から入居した住民を中心に開始された「ふれあいサンデー」という祭りを自治会で継続して開催している。団地の自治会所有の集会場を建設し、交流の場としている。

農村は、76世帯、人口240人、高齢化率35.8%となっている。旧農家集落と6戸の宅地で構成され、旧農家集落は専業農家6戸、兼業農家34戸となっている。1か月に1回、地区の役員会を開催し、行事や役の相談、予算について話し合っている。役員会は、上、中、下の組に関係なく選出される区長、区長代理、会計に、各組3名及び宅地から1名の評議員を加え、構成される。地蔵祭り、子ども相撲大会などの伝統行事や新たな地区の祭りであるホタル祭りも旧農家集落の住民が主体的に運営している。宮座などの集落の役も存続している。

2) 調査の方法

①対象

混住A：区長

混住B：区長および地域の事情に詳しい者(2名)

団地：区長および地域の事情に詳しい者(3名)

農村：区長、

②方法

半構造化インタビュー

③調査期間・時間

混住A：09年1月22日(45分)、2月20日(60分)、
3月17日(47分) 計3回(152分)

混住B：09年2月20日(55分)、5月15日(90分)
計2回(145分)

団地：09年1月23日(30分)、5月13日(87分)
計2回(117分)

農村：09年2月25日(75分)、5月12日(84分)
計2回(159分)

4. 地域社会構造の変化と現状

インタビュー調査を通してまず明らかにされたことは、各地区ともそれぞれ独自の歴史的・社会的背景の中で、劇的な空間(土地利用)構造の変化や経済基盤の変化(特に農家集落における生産様式および組織の変化)、さらにそれらに伴い近隣関係のあり方が大きく変化してきたということである。

混住Aは、戦後まもなく36戸の農家のみで構成

された農家集落であった。畑作農家が大半で、農地も大きいところで1丁程度(うち田は2反程度)であり、川筋にある集落のいわゆる「大百姓」と比較して「小作百姓に毛の生えた程度」と区長は評している。そのような貧しい農家集落の周辺に順次宅地開発が進み複数の団地宅地やアパート・マンションが建設され、農家集落の非農家化とあわせて、複合的、スプロール的に混住化が進んだ地区である。来住者の拡大は現在でも進んでおり、大型宅地開発で出来上がった隣の行政区との境に建設されたマンション(3棟)や現在建設中のマンション(48戸：住所は別の行政区にありながら玄関がこちらにあるということで組み入れられることになった)があり、旧農家集落以外の戸数が200戸以上にも上るとのことである。区長は来住者が拡大していく中での区の運営のあり方の難しさについて次のように述べている。

「前からある団地で、20~30年ぐらいのもの、こういったところは割と良いんですがね。もうひとつ最近建設されたマンションや団地があります。こういったところは都会的なマンションですし、今から入ってくる人は、都会から企業とかに来る人でしょう。だからいろいろバランスを取るのが難しいですね。古い団地は割と良いのですが、ただ、神社とか仏閣とか、昔からのしきたりとかああ言ったことには馴染みませんね。ですから、今度マンションに入られる方に、ボランティアとかいろんなムラの行事とか町の行事とかにも強制的に来てもらうように前もって文書で配るようにしているんですよ。そうでないと、いきなり会費1000円とかいっても払わないからですね。昔からの行事などがあってはじめて向こう三軒があるわけですからね。」

さらに、旧農家集落では今でも「コウジンサン」「テンジンサン」「コンピラサン」といった宮座を上と下の組でまわす習わしがあり、これについて

「そういったことは昔から欠かさずやっていますね。団地の人たちは知りもしないでしょうし、全く関係ないですね。」

と語るように、旧農家集落では非農家の増大に伴う就業構造の変化という波にさらされながらも、来住者とは一線を画した状態で、旧来からの生活組織としてのしきたりや役を存続させている。このような旧農家集落の家々の関係性を維持してきた仕組みはその他にも見られ、共有地の管理、墓地組合の運営、祠の管理(地鎮祭)など複数にわたる。しかし、これらの仕組みが今なお維持されなければならない理由は以下の発言からも分かるように、何らかの機能的な意味が前提としてあるわけではなく、そこにあることつまり「存在(存

続) している」ことが重要であると思われる。

「(共有地には) 木も植えたけどなかなか大きくなりませんよ。何のためにもならないのですよ。将来性もないし。だけどやっぱり土地は土地だからですね。昔からあるものだからですね。管理だけはしていかないといけないからですね。」

このような旧農家集落の家々をつなぐ価値意識は最近の集会場建設にもあらわれている。以下は、集会場建設に関するコメントである。

「区には自治会はないですね。ただですね、行事をやったり、ハコモノを造ったりする場合には、自治会というのを作らないといけないからですね。今度、集会場を造るのに土地を買いました。ここだけで、部落だけで、そうでないと、団地を加えたら、出入りが多いからですね。実際には、区でないと補助が出ないようなこともあったんですよ。だけど、区ですれば相当出入りがあるでしょう。そうすれば固定した財産にならないものだから。だから、区ではなく部落で、ですね。ただ、書面上が「〇〇(区の名称)自治会」という名称ですね。集会場はうちだけのものです。ここだけでないとあとあと問題が起こるからですね。」

このように旧農家集落の価値意識と関係性の強さが存在する一方で、混住Aという区全体では、いわゆる混住化地域における典型的な新旧住民対立の課題だけでなく、様々な構造的変化に晒されている。空間的にはスプロール的な宅地・マンション開発に加え、急激な道路整備(バイパス建設、本田技研工場へ道路整備)が進んでいる。これにより、地蔵祭りにおける歩行者天国が中止になり参加者が激減したり、熊本市まで買い物に行く人が増え、区内の商店はほとんど閉めたままになっているということである。また、団地やアパートに住む人はほとんどが本田技研あるいは下請け会社の工場で働いており、消防団などの地域組織の維持が非常に困難であると指摘している。このことに関して区長は本田技研の進出による地域への影響を以下のように語っている。

「伝統的な行事やしきたりはなくなってきているからですね。時代の流れでもありますよ。大津の場合ですね。いきなり、本田が来て、ごっそり農家の長男も次男もとられたからですね。いきなり変わりました。担い手を一気に取られてということですね。それから変わってきました。それまでは、こういった行事も天神祭もその他にもいろいろ行事があったのですよ。」

1976年の本田技研の進出は大津町にとって大きな財政基盤(財政力指数熊本県第一位、普通交付税交付金不交付団体)となっている一方で、様々な生活構造

の変化をもたらしたということであろう。また先に述べたように、旧農家集落には今も引き継がれる伝統的関係性の強さが存在するものの、来住者が圧倒的に増大していく中においては、以下に示すように区の運営を担うリーダーのあり方が課題となっていると言える。

「誰でもできるのはできるけどですね。ただ一つは、農家の問題とかですね。全体で言うとサラリーマンが多いでしょ。そうすると、区長はそこだけじゃなくて農家の担い手問題とか、転作とか、水田の問題とかそういったことがですね、それに上井出(水利権)の問題や土地改良区とかそういうことも全部あるものですから。なかなかサラリーマンには出来ないことも多いのですよ。」

次に、同じ混住化地域である混住Bは、旧農家集落の周辺に急激な宅地造成やアパート建設が進んだ点では同じ状況にある。しかし、地勢的に平場で中心市街地に近いことや、農家自らが農地を資産として積極的に活用したことにより混住化が進行した点において大きく異なる。混住Bにおける旧農家集落は400年以上もの歴史があり、神社仏閣等の伝統的建築物や「フルミヤ」「フルヤシキ」などの呼び名が残されている。現在のように宅地化、市街地化された住環境について区長らは以下のように高い評価を与えている。

「愛着心があるし、また環境的に買い物は近いし病院は近いし、交通便は良いし、学校も近いし、歩いて行けますからね。」

「熊本市内にできることほとんどないですよ。何か用がなければね。飲み会もここで済むし。それより大津の町中までも行く機会もありません。飲み会もこの近辺にあるから。」

「一番変わったところはここですよ。見違えるようになったからですね。昔の面影はないし、高層マンションができたり、飲み屋ができたりしてね。」

住環境が整備されていく中で、農業が衰退していく現状については「こういう環境で田畑はだんだん減るばかりで、後継者もない」、「農家で生計を立てようなんて100%無理」と評している。現在残された22丁程度の農地は兼業で維持され、専業の3戸以外は、土地売買やマンション等の家賃収入に対して農業収入の割合は極端に少ない。インタビューに応じた3名も多額の家賃収入を得ているが、農家自らが混住化への道筋をつけざるを得なかった事実を以下のように語っている。

「なんで百姓する者が減ったかという、百姓じゃ食べていけないからですよ。だからこんなに

なったのですよ。食べていけるならやめたりしないですよ。」

「もともと、田んぼの圃場整備なんかも入っていたのですよ。でも、私たちがこれはもったいないということで、自分たちの資産を活かそうということで圃場整備から外したのですよ。そこから不動産業者が入ってきて、段々増えて、バブルの時代になって、もう売ったが良いぞということになってですね。だから転々と売られていったんですよ。」

そして、このようにして宅地化された世帯は4つの層に分類できる。「一戸建てに住む町外からの来住者世帯」、「一戸建てに住む町内からの来住者世帯」「旧農家集落の分家世帯」「集合住宅世帯」である。これらに旧農家集落を加えそれらは明確に区別されている。世帯数では圧倒的に「集合住宅世帯」が多いものの（現在248世帯、今年中にさらに90世帯増加予定）、これらの世帯は自治会費を払っておらず（オーナーがまとめて支払う）、入居世帯との面識や交流は全くない。さらに、最近では、業者が直接建設し町外の人物が投資目的のオーナーとなっているアパートがあり大きな課題となっている。そして、これらの世帯層の関係は非常に複雑なものとなっている。例えば、宅地に家を構えた分家は、旧農家集落の「座祭り」に加わることができない（神社の氏子で運営されており、氏子には墓地の権利が発生するため、墓床に制限をかける意図で排除されている）。さらに、旧農家集落と来住者世帯との関係でいえば、「モグラ打ち」や「宮相撲」を通して、交流が図られているものの、実際には地域への関わり方という点において明確な格差があると認識している。旧農家集落では、「葬式組」や3つのお宮の「座祭り」が現在も維持されており、それらを地域に残していくことを当然の義務として捉えている。それに対して、新興住宅の地域への関わり方への評価は低く、

「新興は今の世代で終わりだろう。だいたい、1世代ぐらいの家しか建てていないから。だから、伝統を守っていくのはこの村にしかできないんですよ。本村だけが地蔵祭りとかモグラ打ちとか宮座とかきちんと回しているから、新興住宅の新しく入ってきた子どもたちも一緒になってそういうのに参加できるんですよ。」

「ほとんど、区の行事は本村が中心です。新興住宅に来た人は、たまたまその時に組長になった人だけが来るだけ。」

と語り、区の運営には世帯数では圧倒的に多い新興住宅よりも、旧農家集落がその中心にあると考えている。その上で、今後の区のあり方について、区長の選出に

絡めて以下のような発言をしている。

「本音を言いますと、何としてでも区長はこの村から取っていかなくちゃいけないです。それは、早い話、選挙でもしたら、あっちが頭数は多いから、あっちが取りでもしたならば、それは、伝統も文化もどんなになるか分かりません。いわゆる自分の勝手なことばかりしかできないような人が、隣近所のことも分からないような人がリーダーでもなったりしたら、なんでもかんでもやりだすかもしれないということで、それだけは、正直な話、本村の者はみんなそんな思いです。」

このように、混住化地域における典型的な課題としての新旧住民の交流の困難さが指摘される。しかし、このような課題は大きく表面化されることはなく、現実的なレベルでの地域活動（宮相撲やモグラ打ち）が、新旧住民の交流を通して（特に子どもを介して）続けられている。以下の発言から分かるように、農家としての跡取り（子ども）のいない旧農家集落の伝統行事が、子どもを多く抱える新興住宅世帯の存在によって支えられているのである。

「本村には子どもが何人もいないでしょ。後継者がいないんですから。しかし、区全体では子どもも100人超えているし（旧農家集落では5～6名）、その6年生の親が会長になって、地蔵祭りもモグラ打ちも一緒に準備しているんですよ。私たちが若い時は、本部落だけでは何もできなかったのですよ。隣の区と何でも一緒にやっていました。親子ソフトボールも合同でチームをつくらなかったとできなかったこともあります。それが今では、100人もいますよ。少々力のある子ども選手にはなれないほどです。町の運動会でもほとんど一番ですよ、ここは。」

以上のような状況を振り返り、区長自らは「この新区は単なる混住化ではない特殊な地域です」と評している。

次に、団地についてであるが、いわゆるニュータウンであり何も無いところにはほぼ同時期に入居した世帯が多く、混住AやBと比較してそれほど劇的な空間的・社会関係的な変化が生じているわけではない。しかし、大型宅地団地特有のいくつかの地域生活課題が存在している。もともと昭和45年に開発された大型宅地団地（本田技研に近いことから昭和50年操業にあわせて開発された）の隣接地に昭和57年に開発され当初30世帯ほどが入居した。その後、続々と入居者が増える中で平成19年に行政区の再編により独立した区となった。開拓当初より入居した30世帯が中心となり、先に開発された宅地とは別に自治会を組織し地

域活動を展開していたため、平成19年の区割りで独立した形となっている。その際、独立の引き金となったのは町が制度化した「特区制度」であった。「特区」の補助金が各行政区に支払われるが、当時の区内には2つ宅地団地にそれぞれの自治会が存在していた。強烈なリーダーシップのもと積極的な活動を展開していた本団地自治会が行政サイドへ働きかけ独立した経緯がある。居住空間としては、町の市街地北部の高台に造成された宅地であることから、団地近辺に商店や病院はほとんどなく、公共交通機関もないためそれほど利便性のある地域とは言えない。団地前の道路は阿蘇地域に向かう県道であるが、5年前に開通したばかりで、それまでは団地の前で行き止まりとなっていたため比較的閑静な場所であったという。しかし、県道として開通後は、観光地阿蘇への近道として利用されることが多く、区長は「高速道路」みたいですよと述べている。住民の地域との関わりについては、以下の語りのように、世代的に比較的若い層がいることから希薄な部分はあるが、全体的には交流や連帯感が存在していると評している。

「大津町で地域福祉の推進地区というのがあって、そういったものを取り入れてここも何とかしていきたいと思っています。ただ、去年、自治会の総会の時にそういったことの話をしたんですよ、でも、ほとんど関心がないんですよ。それで、何故だろうと考えていたら、去年町が発行している生涯学習情報に町の行政区別の高齢化率というのが出ていたんですよ、それをみると、60いくつある行政区の中で若い方から5、6番目なんですよ、それで、こんなに若いのかと私自身びっくりしたんですよ。ただ、地区のために何かしようという者は、仮に私が将来的に区長をやめたとしても、何らかの形で、みなさん、協力者をつくってやっていきたいという気持ちは持っていますよ。しかも、ここは皆が疎遠かというところでもなくて、結構、行き来はそれぞれの組であるし、年に1回は夏祭りもやっているんですよ。そういうことで、結構、連帯感というのもあるし、良い団地だというふうには思っていますけどね。」

さらに、今後の展望についても、

「今までが皆が若かったということもあって、そこまで区のことに関われる人がいなかったんですよ。最近、少しずつ定年退職者とかが増えてきているから、これからはまだ見つけやすいんじゃないかと思えますよ。」

と比較的楽観視している。

最後に農村についてであるが、混住A・Bにおける

旧農家集落と同じく、区長が

「専業していても後がないんですよ。私もですけど自分でやっても後がないのがほとんどですね。自分たちの年代だけですね、3、4人専業でしていますけど、誰ひとり後継者はいないんですよ。村の中では若い人が一人、50代後半ぐらいですかね。そして、長男さんも20代で独身でいますからね。そこはどうかなるかもしれませんが。」

と語るように、集落の非農家化がかなり進んでいる。国際的な価格競争や大資本の参入による零細農家への影響は大きく、農家集落の先行きに大きな不安を抱えているという。このような兼業化、非農家化といった就業構造の変化は、これまで生産組織と生活組織が一体化していた集落の社会生活にも大きな変化をもたらすことになった。集落では婦人会も解散し消防団の団員確保も困難な状況にあるという。

しかし、一方では集落の人びとを歴史的・空間的に関係づけてきた仕組みがいまだに維持・機能しているという事実も確認される。それらは、「農村」という明確な空間的範囲と相互認識（個体識別）される人びと（徳野、2011）の存在によって維持されている。また、非農家となった家であっても、農的暮らしの空間に暮らし続ける人びとにとっては、集落の財産はいまだに重要な意味を持ち続けていると思われる。共有林の維持管理はもとより、そこから得られる収益（材木の値段が下がったと言っても、これまで数百万円単位の収益があったという）に絡む家々の関係性は長い集落の歴史のなかで築かれたものであり、このことが集落の凝集性の強さの一因にもなっていると思われる。

このように、それぞれの地区が様々な構造的な変化に晒されており、その結果、地域生活者としての暮らしぶりは混住化地域、団地、農村でそれぞれ異なるものとなっている。そして、それぞれの地区の事情により地域生活の実体が希薄化する中で、人びとの関係性の維持・再生に対する取り組みが行われ、前述したようにスポーツ活動は中心的ではないが、それとはなく取り込まれている。そこで、このようなスポーツ活動が、それぞれの地域構造の特徴に応じてどのように社会的に位置づけられているかということを以下では確認していきたい。

5. 地域社会とスポーツ活動の関係性

先に述べてきたように、混住地区と比べて団地および農村では日ごろから安定した関係性を有しており、

比較的地域活動が盛んな地域と言える。例えば団地では、毎月1回必ず自治会の役員会（役員および組長が参加）が開催されており、年1回の総会（1月）や「ふれあいサンデー」（9月）という地区の祭りを実施している。清掃活動についても

「5月から12月まで、月に1回。その時に、全員ではないですけど、全員に近い人が、その公園とかに集まっていますね。そういうところに話の場というのがありますね。」

と語るようにコミュニケーションの場が存在している。その他、手作りで地蔵小屋をつくり町全体の地蔵祭りに参加したり、開発時に作成された自治会規約は大津町の他の地区の規約のモデルになっているという。このような団地の自治機能の充実ぶりは以下のような側溝浚渫に関するコメントにも現れている。

「やっぱり、他の地区にないのが、道路の側溝浚渫ですね。溝深いです。どこでも行政に頼んでいますからね。だいたい行政に頼んで良いんですけど、いつくるか分からないこともあって、自分たちでしょうと、年に2回ですね。側溝を全部あげてですね。これはよそにないと思います。」

そして、これら活動を支えてきたものとしてリーダー（先住者）の存在や「軒数的にもちょうどまとまり易いしですね。地理的にも範囲がはっきりしているし、これ以上増える要素もないしですね。一番良い状況ですね」と語るような明確な範疇、さらに集会場という共有財産の存在が挙げられる。

これらの状況は農村でも確認される。昭和初期から始まった共有林の維持管理（利益分配は当時の馬の口数で決められている）、強烈なリーダーの存在（現町議の祖父で、部落の60戸単独で農協を開設した人物）がある。また、ムラとしての空間的構造は明確であり、農振地域指定（それに伴う農業委員会の権限）などにより制度的にも安定している。このような背景のもと、自治会活動（区費は年間1戸あたり6000円～8000円で、総会費用、水防予算、道普請、公民館の管理費などに使用）も機能しており、伝統的な地蔵まつり、子ども相撲大会、ホタル祭りなどを実施している。お宮の座祭り（11月）では準備を農家集落の上、中、下の組で回っていて、その中から1戸の宮座を決めるなどのしきたりも維持されている。前述したように、兼業化、非農家化による地域集団や会合（役）の減少は避けられないものの、ホタル祭りなどの新たな地域行事への取組や子ども相撲大会を存続させるためにムラから嫁いで出て行った子供家族を参加させるなどの工夫により、集落内の人びとの関係性が維持されている。

どちらの地区も相互認識が可能となる明確な共同的

空間（範疇）とリーダーの存在により、自治的活動が維持され安定した人びとの関係性が保たれていると考えられる。このような地域にとってスポーツ活動はどのような位置にあるのであろうか。団地では、開発当時から結成され今も活発に活動するソフトボールチームがあるが、それについて以下のやり取りがあった。

「団地の人の集まりという、ソフトボールの愛好会がありますよ。」

「自治会の中にとのことですか？」

「いや、自治会ではなく、団地の中で。」

「それは練習とかもあるんですか？」

「そうです。練習もしていますよ。練習もして飲み会もしていますよ。試合で勝っても負けても終わると必ず集会場で飲みますから。昔は集会場がなかったからですね。部員の家のところにローテーションを組んでですね。そうすると、例えば家族全部分かるわけですよ。そういった意味では、迷惑だったけども、良かった面もありますね。」

このようにソフトボールチームでの活動は、地区の自治会という地域全体との関係で捉えられるのではなく、あくまでも団地内の同好の集団活動と認知されており（現に区長は町の別のソフトボールチームに所属している）、集団内部における親交的コミュニティという側面が前面に出ている。チームが結成された理由についても

「ソフトボールが町のほうに協会もあって、結構数も多かったからですね。まあ、手頃なスポーツだからですね。」

と答えるように特にスポーツ（ソフトボール）に対する地域的な期待があったわけではない。このことは、隣の地区で盛んに行われているグランドゴルフについても、

「〇〇地区はミニ特区事業で何もすることがなかったんで、とりあえずグランドゴルフでもやるかということだったようです。簡単にできるのはグランドゴルフだけということでした。」というコメントからもうかがえる。また、女性のフラダンスの活動についても以下のコメントが示すように特に地域（団地）とスポーツといった文脈で語られることはなかった。

「そういえば、フラダンスも団地の中になりましたね。あちこち老人ホームの慰問とか行って。」

「それは、団地でというのではなくて、団地のなかにフラダンスを教える先生がいて、それに区の人たちが何人か参加しているということですよ。この団地がしているということではないですね。」

一方農村では、集落内のお宮跡地にグランドゴルフ

場が造られ頻りに利用されており、高齢化の進む集落にとっては、格好の溜まり場となっている。しかし、インタビューの中で、高齢者のグランドゴルフ活動が集落の活動との関連で語られることは、逆に自治会がそれらの活動を支えている（昨年、自治会のほうから申し出でグランドゴルフ場に向かう取り付け道路や防球ネットの整備を会費で賄った）状況が示された。また、集落には隣の区とまたがった形で大型のスポーツ施設（サッカー場4面、陸上競技場、総合体育館など、平成11年くまもと未来国体サッカー会場として建設。集落から10丁歩ほど土地を提供）があるが、施設建設の集落への影響について以下のように語っている。

「何にもない、何の収入源にならないでしょ。道路も良くなならないし。（グランドの）表だけですよ良くなったのは。表には道がなかったところに大きな道ができて、集会場もできたですね。だけど、こっちの裏側はね。逆に、サッカーなんかがある時は駐車場が足りなくて、その道路に停めるんですよ。そうすると私がトラクターで通ると危ないんですよ。」

このように、地域（自治）活動が比較的盛んで、安定した関係性を維持するする農村および団地では、地域におけるスポーツ活動の社会的位置は後景化し、一見、地域社会におけるスポーツの位置はそれほど重要なものとはなっていないことが示唆される。

一方、混住AおよびBではどうであろうか。混住Aでは、以下に述べるように、宅地の開発当初は地域的な活動が旧農家集落と宅地の間でも行われていたが、混住化の進展（来住者の拡大）とともに衰退していった。

「全体的にあまりしていません。カラオケ大会とか前はやってたんですよ。夏祭りもやりましたよ。舞台もありますしね。公民館の広場に舞台を作ってやっていました。だけど、今は勤めが多いでしょ。で、舞台は作らないといけないうでしょ。それが年寄りだけではできないでしょ。ですから、当時は若い者、若いと言っても40代から50代ですけど、3日間とか集まって舞台とかテントとか作ってですね。しかし、お金が余りかかりすぎると、前後の段取りとか大変でしょ。それで最後の3年から4年はカラオケ大会だけになってしまったんですよ。ところがカラオケ大会になると出る人が毎年毎年決まっているものだから、2、3年すると飽いてしまつてとうとう崩れてしまいました。もう10年近くなりますね。何か全体でしなければいけないと思っているんですがね。」

そのような中、区長は地区の取り組みとして

「清掃作業とか、赤い羽根募金とか、老人会費とか、地区のスポーツ大会とか、面々それぞれのこととはかなり多くやっていると思うんですよ。」と述べている。清掃活動などに対しては比較的参加者も多く、それなりの（必要最低限な）関係性が保たれているが、自治会活動がそれほど機能しているとは言い難く、年2回（1回は、毎年役員が代わるため顔合わせを兼ねた懇談のバーベキュー）の役員会の出席率は良くないという。

同じような混住化にあるBでも、伝統行事に対する新旧住民の捉え方について

「心のよりどころというか、そういうものが旧村の者はあるし、伝統も残していくし、しかし、新興住宅の者はただ生活するだけの話だから、隣近所ともあまり交流もないしですね。」

と語るように大きな格差を実感している。しかしそれでも混住Bでは、地蔵祭りやモグラ打ち、子ども相撲を新旧住民の協力のもと実施しているという。いずれの行事も子どもの存在抜きには維持することのできない行事である。大津町の中でも最も生活環境が良いとされるこの地区では若い夫婦世帯が多く、子どもの数も比較的多い。そのためこれらの行事は子ども会の行事として行われており、旧農家集落の人々は準備（竹や土俵など）の手伝いをするだけである。先のアンケート調査結果でもこれらの行事は上位3項目に入っているが、実際には、地区全体の行事ではなく子ども世帯中心の行事といえる（しかも、毎年メンバーが交代する）。さらに、混住Bでは、以下に示すように地区全体としての活動については清掃活動を含め行われていない。

「ここはまったく何もない。よそはやっていると思いますが。ところがここは何にもない。ここだけでしょうね。いろんな役がないのは。」

「区の一斉清掃とかも全くないですよ。美化活動は年に何回かやっているようですが、それは子供会とか中学生とかがすることですよ。」

以上のように、混住A、Bともに地域の関係性の非常に希薄な地区といえる。しかし、アンケート調査でも示したように、混住Aでは最もスポーツが盛んな区となっている。また、混住Bでは前述したように大津町の中でも子どもスポーツの盛んな地区となっている。そして、地区で行われているスポーツ活動について、混住Aの区長が募金活動など同じ位置づけで語るように、強制的ではなく誰でも気軽に参加できる数少ない地域活動として捉えている。このことは以下のコメントからもうかがえる。

「地鎮祭などは、半強制というか、学校の行事と同じですから、絶対やらなくてはいけないとい

う意識がありますから。ほかの行事は出たり出なかつたり。でも、スポーツ大会ではできるだけ皆ができるようにしたりはしますね。」

また、混住 B では区の共有財産として運動広場がつくられており^{注2)}、子どものスポーツ活動の場として活用されている。

このように地区としての一体感に乏しい混住化地区では、区の人びとの紐帯となるべきものがないため、スポーツが地域生活において比較的重要な位置を占めているということである。スポーツ活動の社会的位置が前景化されているといえるであろう。

しかし、基本的にはこれらの混住地域におけるスポーツ活動も、先に述べた農村や団地と同様に地域との関係で語られるものではなく、以下のように地域内の人びとが任意に、個別的に（同好の集団で）実践している活動として捉えられている。

「区の中には任意で入るもので、グランドゴルフとかいうようなものは、いろいろあるみたいですね。」

「区のソフトボールチームとかはまだしているでしょう。それには宅地の人も入っているでしょう。好きな人がいるでしょうし、グランドゴルフとかも何人かそこの運動広場でやっていますね。私たちは本当のゴルフにはいきますけどね。」

このように関係性が乏しく相互認識の低い混住地区では、スポーツ活動は個別の地域的な活動にとどまるものの、個々の活動の総体としては前景化され、量的拡大という側面では評価される。しかし、それらが単独で地域社会形成という側面に何らかの役割を果たす可能性は低いと言わざるを得ない。

一方で、団地のソフトボールチームについてみると、確かに前述したように日常的な活動レベルでは地域との関係性が希薄であった。しかし、前区長が

「私も 64 歳まで団地のチームでやりましたけど、それからは審判をやっています。審判のほうで今も毎月出ています」(30 数年前の開拓当初からチームに参加)

と語るように地区のリーダーやそれを支える人びとの多くがソフトボールチームに関わっている。このリーダーらが団地の共有財産としての集会場建設を推進し、チームの懇談の場として活用している(ソフトボールチームのメンバーが集会場で開いている宴会は団地では有名であるという)。また定期的な練習のほかにも、団地の清掃活動(毎月 1 回)の時にもあわせて練習するようにしているという。このリーダーらの取り組みは、以下に示すように団地のシンボルとなっている「ふれあいサンデー」(半日はスポーツ活動を行う)の運営のあり方にも端的に現れており、団地の関係性

の強さを象徴しているといえる。

「余所からくるし、若いしですね。そうすると私たちの旧式のやり方が合わないという人も多くいますからね。だけど、私たちが(ふれあいサンデーをやめる)話が出たけどそれを押し切ったんですよ。」

「ふれあいサンデーも進行から準備もその年の役員さんがやるんですよ。とすると、そんなにきついことまでしてはとか、できるだけ負担の少ない方向でやりましようとかの意見がないことはないんですよ。でも、それはだめよと。」

「子どもがいるからとかいろいろ言う人はいますけど、我々もみんな協力するから大丈夫だよと。私たちがおりますから、リタイア組もだいたいいますから、大丈夫と。」

「年配の人たちが率先してやられるからですね。私たちがもじっとしているわけにはいかないからですね。なんか手伝うことがないかと。」

また、農村では自治会によるグランドゴルフ場に関連する環境づくりが行われてきたが、これら一連の取り組みは、まさに地域の自治機能に支えられた取り組みと捉えられるのではなからうか。それだけでなく、地域における自治会の役割も限定されてきている状況に置いて、集落の関係性の中で維持されてきた自治会の機能を再び引き出すきっかけとなり得ているのではないかと考えられる。さらに、農村では混住 B と同じように、子ども相撲を毎年開催している。旧農家集落にはほとんど子どものいない状態はどちらも同じであるが、混住 B では新興住宅の子ども会の行事として行われ(農家集落と新興住宅の交流の意味もある)、一方農村では、他出子の子どもや孫がその中心となっている(農村の他出子の多くは同じ大津町の市街地に居住する)。毎年顔ぶれが代わる子ども会のイベント的行事として様変わりした形で存続し、宅地の子どもの数の増加とともに盛大になった子ども相撲は混住 B という地域においては比較的前景化されているといえるであろう。それに比べ、ムラの行事として血縁・地縁を頼りにそれなりに維持されてきた農村の子ども相撲は地域のなかで後景化しつつある。しかし、家族を中心とした安定かつ相互認識の強い関係性で維持されている農村の子ども相撲には、何らかの意図的な機能(混住 B における新旧住民の交流行事など)が託されているのではなく、存続すること自体に家を中心とする集落の関係性の確認作業ともいうべき意味があるのではないと思われる。

このように、一見後景化される農村や団地のスポーツ活動は、活動そのものは地域社会との関係を直線的(機能的)に捉えられるものではなく、他の地域活動や

家族との接点をもつことで、あらためて地域との関係性を問うことが可能になるのではないかと考えられる。

6. まとめ

本研究で明らかにされてきたことは、従来の地域社会とスポーツの関係で取り上げられてきたような自治的機能と親交的機能の関係性を問うものではない。現代社会において拡散しつづけるスポーツはどのような地域社会（農村や団地、混住化地域）にも浸透していく。そして、スポーツの持つ汎用的な（“いつでも誰でもどこでも”という言説に代表されるような）機能が一見地域社会内の関係性構築に有効な手段として捉えられるが、それは自立した個人を前提とするネットワークの構築であり、同好の集団内で止まることも、あるいは地域を超えて広く拡散していくこともある。今回の事例から唯一指摘できることは、スポーツに限られた地域の中で社会形成的な役割を担う可能性があるのは、その地域が明確な物理的・空間的な範囲を有し、そこに住む人びとの相互認識が可能な状態にある場合ではないかということである。混住化地域のようにスプロール的に土地開発が行われ関係性の薄いところでは、一部の関係のある人々を“顔見知り”にし“交流”することは可能であろう。しかし、このようなスポーツをする人が増えることと地域社会における関係性が積み上げられることは決して短絡的に結び付けられないということである。同じようなスポーツ活動であってもその置かれた地域社会の関係性のあるり様によって異なる社会的位置に位置づけられるということであろう。

参考文献

- 後藤貴浩(2008) 農山村の生活構造と総合型地域スポーツクラブ：生活のあり様とスポーツ実践の関係性に着目して。体育学研究, 53 (2): 375-389.
- 後藤貴浩(2010) 地域社会分析から捉えるスポーツ活動。熊本大学教育学部紀要 人文科学 59: 239-249.
- 伊藤恵三・松村和則(2009) コミュニティ・スポーツ論の再構成。体育学研究, 54 (1): 77-88.
- 松村和則(1978) 「地域」におけるスポーツ活動分析の一試論－宮城県遠田郡涌谷町洞ヶ崎地区の事例を素材として－。体育社会学研究会編 体育社会学研究七【スポーツ政策論】。道和書院：65-98.
- 松村和則・前田和司(1989) 混住化地域における「生活拡充集団」の生成・展開過程－「洞ヶ崎」再訪－。体育社会学研究会編 体育・スポーツ社会学研究 8【スポーツの社会的意味をさぐる】。道和書院：119-137.
- 鈴木広(1986) 『都市化の研究』。恒星社厚生閣：434-464.
- 徳野貞雄(2002) 現代農山村の内部構造と混住化社会。鈴木広監修 シリーズ社会学の現在 2【地域社会学の現在】。ミネルヴァ書房：231-237.
- 徳野貞雄(2011) ブラックボックス化する『地域づくり』と『モエ』集団。季刊『中国総研』第 53 号。社団法人 中国地方総合研究センター。

注

- 1) アンケート調査は、熊本県大津町を対象に平成 20 年度～平成 22 年度科学研究費補助金（基盤研究 (C)）、代表者後藤貴浩、課題番号 20500550）において実施されたものである。第一報の成果の一部は第 19 回および第 20 回日本スポーツ社会学会一般発表で報告されている。各地区の回収率等は以下のとおりである。混住 A=278 戸（回収率：37.8%，サンプル数：105）、混住 B=256 戸（回収率：35.9%，サンプル数：92）、農村=70 戸（回収率：64.3%，サンプル数：45）、団地=120 戸（回収率：70.0%，サンプル数：84）
- 2) 土地は旧農家集落のものであり、集落では共有財産を持っていなかったので「運動広場でも」ということでつくられた。しかし、実際に使用するのは新興住宅地の特に子どもたちであったことから、新興住宅地を含む区全体の財産として管理するようになった。